

中東の宗教

アラブ調査室 2022年4月～2022年6月
「中東の宗教」全6回、オンライン配信

- 第1回 4月22日 総論、中東地域の独自性と宗教地図(塩尻和子、筑波大学名誉教授)
(15:00～17:00)
- 第2回 5月 6日 中東に残るキリスト教(岩崎真紀、松山大学教授)(18:00～20:00)
- 第3回 5月13日 歴史を生きる教会、エジプトのコプト正教会(岩崎真紀)
(18:00～20:00)
- 第4回 5月27日 中東に残るユダヤ教(志田雅宏、東京大学専任講師)(15:00～17:00)
- 第5回 6月10日 イスラームの宗派(菊地達也、東京大学准教授)(15:00～17:00)
- 第6回 6月24日 イスラームの日常生活、多宗教共存(塩尻和子)(15:00～17:00)

(第6回のPPTで掲載写真の撮影者の氏名が記載してないものは、すべて筆者か同伴者かが撮影した。)

②パレスチナのヘブロンにあるマクペラの洞窟

ヘブライ語聖書(旧約聖書)の記述の通りに、アブラハム夫妻と、イサク夫妻、エジプトで死去したヨセフの墓も安置されている。アブラハムの墓には「われらが父、アブラハム」という札がかかっている。建物にはモスクとシナゴグが併設されている。1994年には極右のユダヤ人によるテロが起き、礼拝中のムスリム29名が犠牲になった。現在はイスラエル軍が常に警備している。

ヘブロンのアラビア語名ハリール(Khalīl,「神の友」の意で、アブラハムを指す)



③岩のドーム

ウマイヤ朝第5代のカリフ、アブドゥルマリクが建設を命じ、688年に着工したとされる。元はユダヤ教の神殿の場所であり、「神殿の丘」と呼ばれ、メシアの到来までは、ユダヤ教徒はこの地域に入ってはならないとされる。ドームの中に巨石が存在するが、これを族長アブラハムが息子イサクを神に捧げようとした場所だとする。またイスラームでは預言者ムハンマドが神に導かれてこの岩から天上飛翔を行ったとされる。その意味で聖なる巨石を覆うドーム型の建築物となった。何度か修理・再建されており、現在の建物はオスマン帝国時代に修復されてものである。



④アル・アクサーモスク

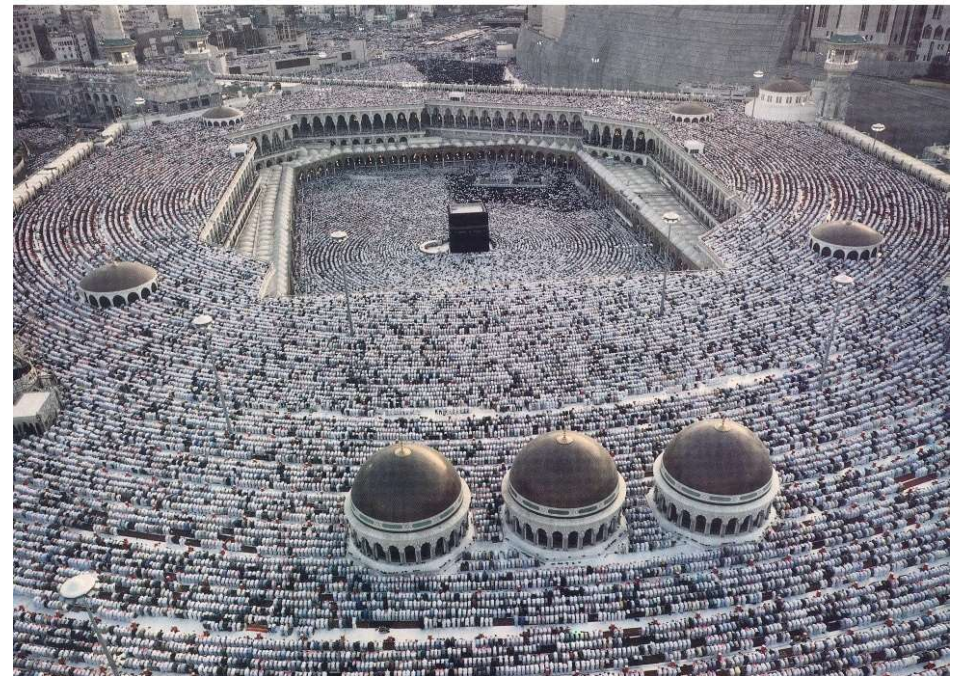
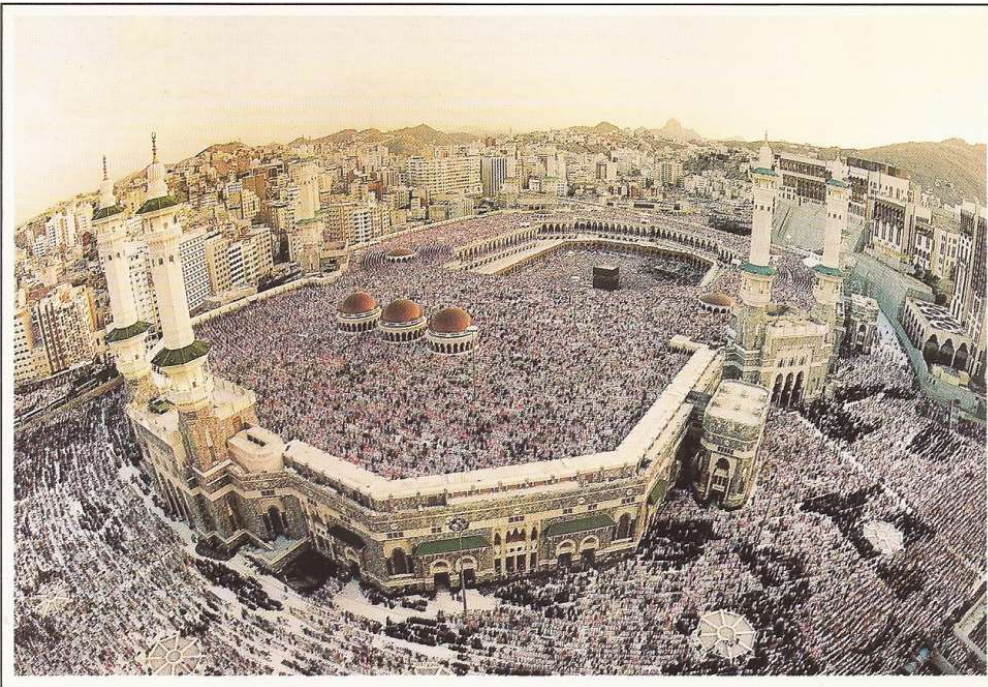
「最も遠い場所にあるモスク」の意味で、預言者ムハンマドが天馬に乗って天上飛翔をしたことを記念するために705年から709年にかけて建設されたモスク。何度も火災などで修復・再建されていて、当初の面影はほとんどない。また1951年に当時のヨルダン国王、アブドゥラー1世が銃撃されて死亡した事件がおき、1969年にはオーストラリア人に放火されたこともある。2000年に発生した第2次インティファダの起点となった。



⑤マッカの聖モスク

左右ともマッカのカーバ神殿を中心とするモスク施設、1年に一度、巡礼月に世界中のムスリムが義務の宗教儀礼となる巡礼に集まる。その他の時期に参拝することはオムラと呼ばれ、義務行為とはみなされない。義務の巡礼を無事に終えた人は、男性は「ハーτζュ」、女性は「ハーτζジャ」と呼ばれて尊敬される。現在ではコロナ禍の2年間を除けば、200～300万人も集合すると言われる。写真は巡礼時の巡礼者であふれている聖モスクの様子。

(これらの聖地は非ムスリムは訪問できない。写真はサウジアラビア大使館から提供)



⑥マディーナにある預言者モスク

右はイスラームの預言者ムハンマドの住居を含む地に建設された預言者モスクで、預言者と、初代と第2代のカリフの墓を覆っている。現在では、一度に100万人を収容できる巨大モスクになっている。

左は預言者モスクの奥に設置されているムハンマドの廟、両横に初代と第2代のカリフも眠っている。

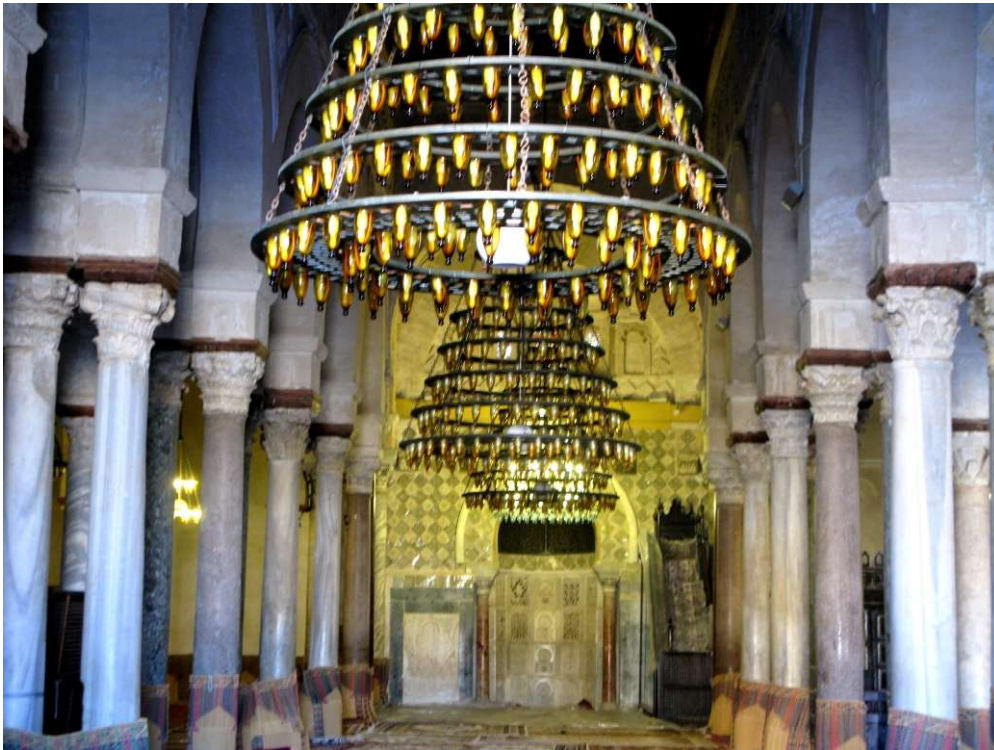
(これらの聖地は非ムスリムは訪問できない。写真はサウジアラビア大使館から提供)



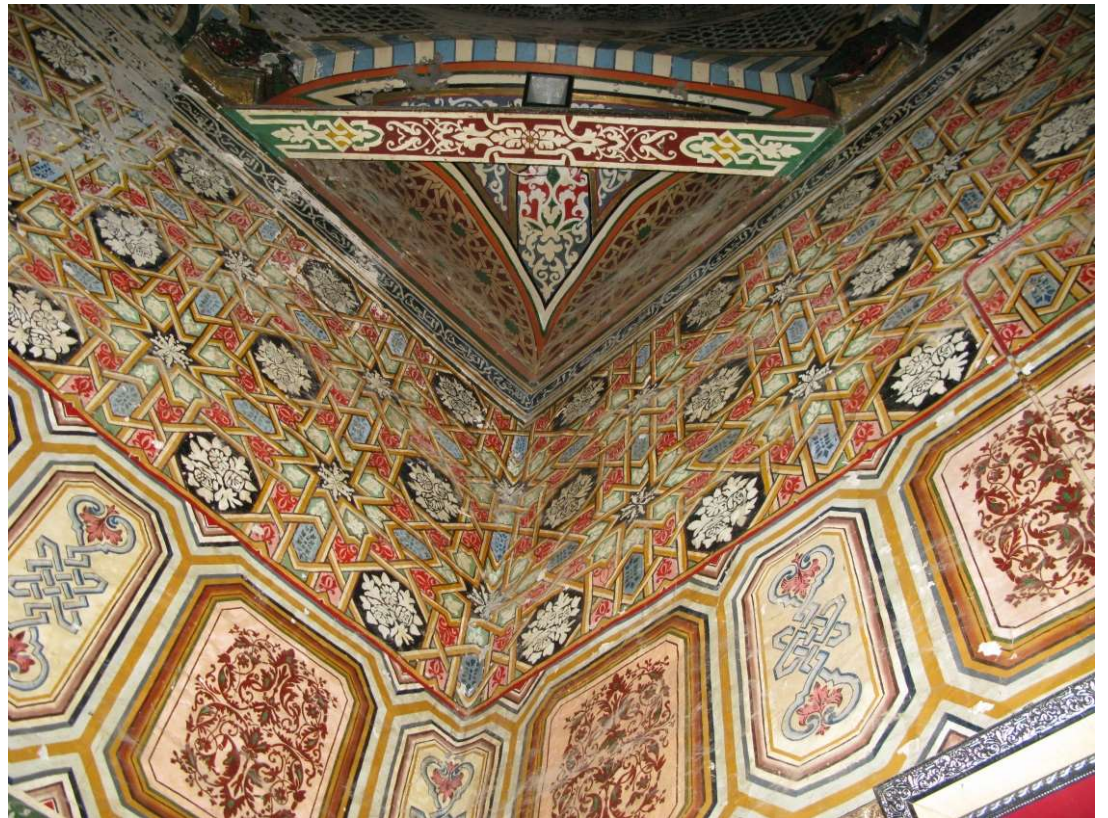
⑦ウクバ・モスク(大モスク)、カイラワーン、チュニジア

670年ころから建設、世界遺産カイラワーン(ケロワン)旧市街にある。ムスリム以外は会堂内に入場禁止。 女性はスカーフが必要。

右は境内と会堂の間にある列柱、近隣のローマ遺跡から借用してきた柱が並ぶ。左は会堂の中でミフラーブとよばれるマッカの方角(礼拝の方角)を示す窪み。

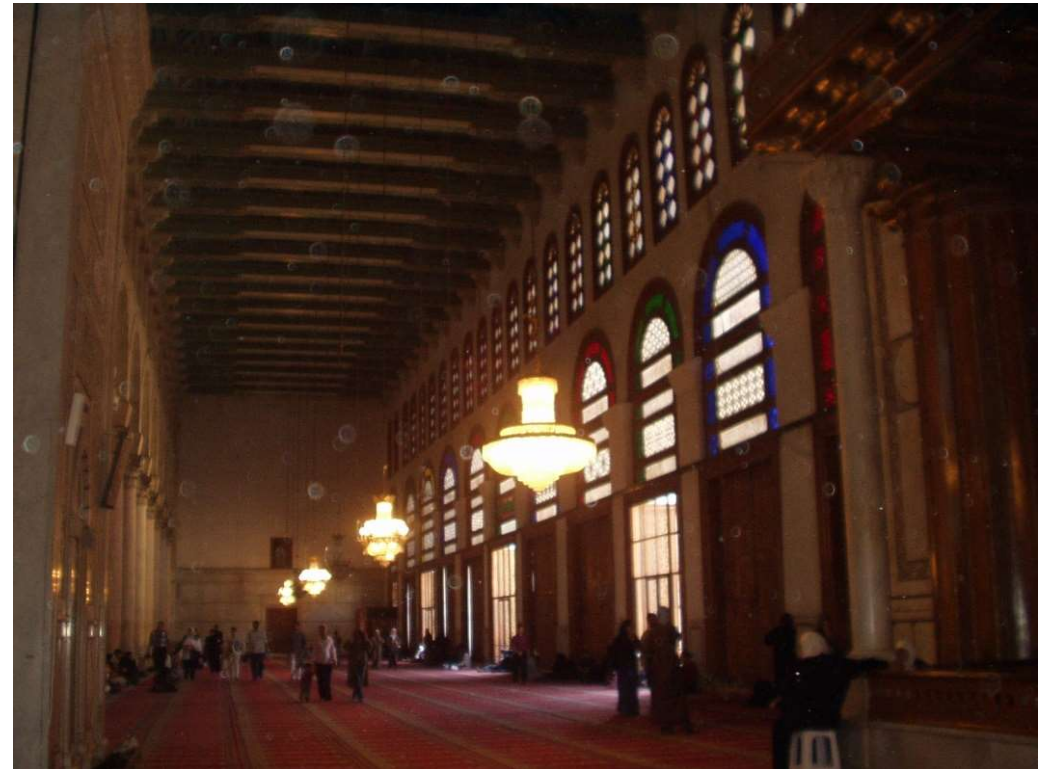


⑧ウクバ・モスク(大モスク)、カイラワーン、チュニジア
右は近くにある聖者廟の壁を飾るタイル、アラベスクの美を表現している。左はウクバ・モスクのミナレット、四角形のミナレットは北アフリカに多い。



⑨ウマイヤ・モスク(706-714)、ダマスクス

元は聖ヨハネ教会、ビザンティン様式のマザイク装飾をよく残している。会堂の奥には、洗礼者ヨハネの首塚があり、ムスリムも参詣する。右はモスクの会堂内部、ステンドグラスが美しい、左はモスク外壁を飾るマザイク画、樹木や建物が描かれている。建設や装飾にはビザンツの工芸職人も雇われたと言われる。



⑩イブン・トゥールーン・モスク

868年、カイロ市内で最古のモスク、境内の外側にミナレットがあるのはイラクのサーマッラーの形式。堂内を飾るステンドグラスも浮き彫りも、素朴な細工であるが、一つとして同じものがなく、当時としては粋を凝らしたことがわかる。(写真は修復中の様子)

ここからシタデルのムハンマド・アリー・モスクがみえる。またモスクと密接した敷地にゲイヤー・アンダーソン・ハウスがある。イギリス人将校が裕福な商家を移築して博物館にしたもので、当時の大商人の豪華な生活が展示されている。



⑪ アズハル・モスク(970年)、カイロ

イスラーム世界最古級の学問所も972年に併設され、世界最古の大学の一つ。現在、大学はモスクから独立して総合大学になっているが、ムスリムでなければ入学できない。

左はアズハル・モスクの正面、右は反対側にあるフサイン・モスク、シーア派の第3代イマーム・フサインの首級を納めた聖廟があり、非信者でも参拝できる。フサインの首級は十字軍の襲撃を恐れた信者の手で運ばれたと伝えられる。



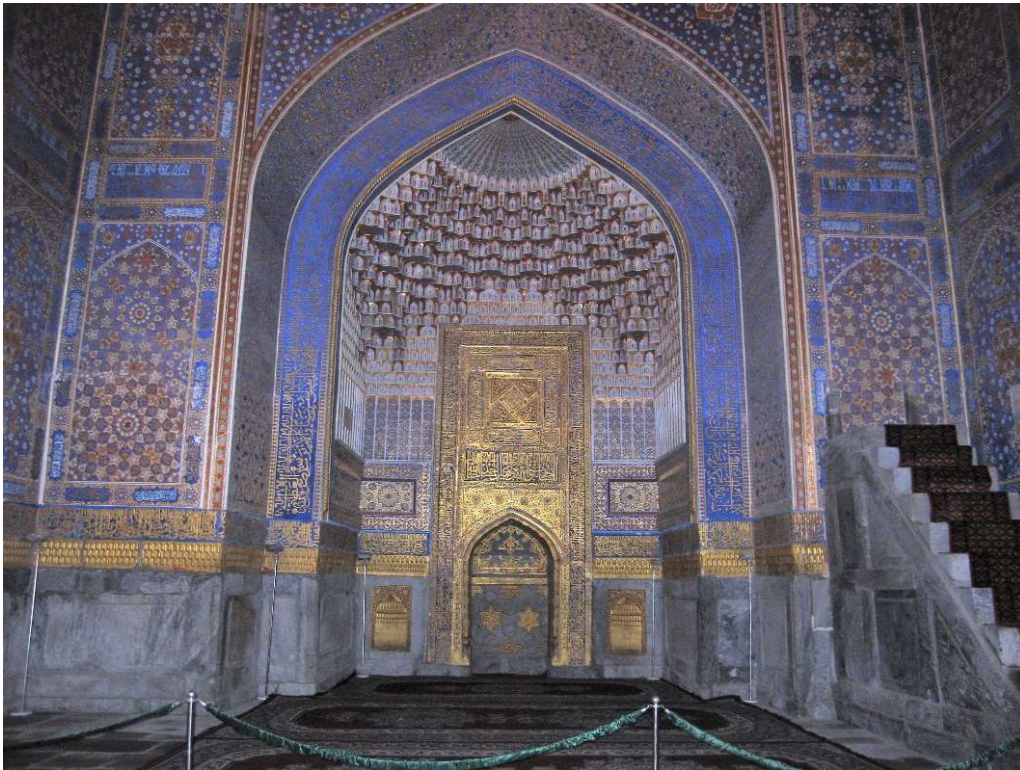
⑫リビアのモスク

トリポリ旧市街にあるカラマンリー・モスク、右は扉の装飾、シンプルだが美しい彫刻、左はモスクの内部。カラマンリー朝(1711～1835)は、リビアで初めての王朝で、境内には初代の国王アフマドと一族の墓所があり、初代国王のアフマドは聖者のように崇敬されている。



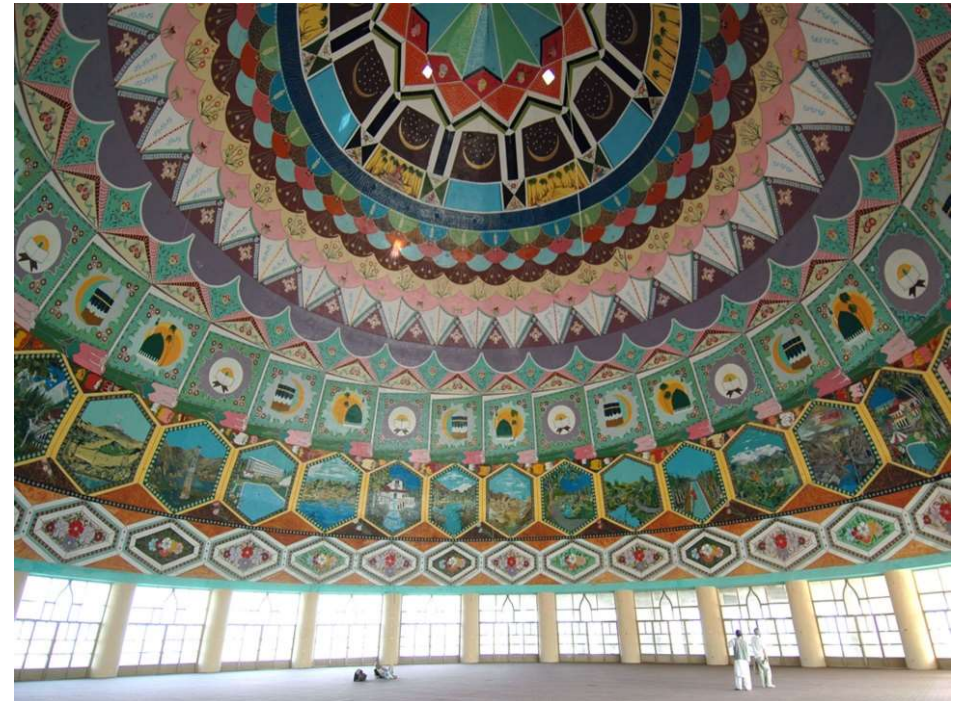
⑬中央アジアのモスク:ウルグ・ベクのモスク

サマルカンドにあるレギスタン広場、ウズベキスタンの独立後、次第に復旧整備されている。左はティムール朝の第4代君主、ウルグ・ベク(1394-1449)のマドラサ(高等教育機関)のミフラーブ(マッカの方角をしめす壁龕)。非常に美しい。右はウルグ・ベクのマドラサなどがあるレギスタン広場の全景。ティムール朝の絶頂期を示している。ウルグ・ベク配下の学者たちは今日でも通用するほどの精密な天文表を作成した。在位僅か2年、不運なスルタンであったが、今日の世界にとっても、大きな貢献をした。



⑭アフガニスタンのモスク

下は、アフガニスタンのターリバーンの前指導者、ウマル師(2013年没)の建てたモスク(山田利行氏撮影)。右は内部の天井画、左は外側。美しい色彩豊かなモスクで、アフガニスタン各地のモスクの風景が描かれている。厳格な政権を指揮をした指導者とは思えないほど、柔らかく美しいモスクである。後日知ったところによると、ウマル師自身は柔軟な思想を持ち、バーミヤンなどの仏教遺跡の保護を訴えていたと伝えられる。



⑮現代のイスラーム(1)ムスリム女性の活躍

- ・ムハンマドは妻たちを丁寧扱い、女性の意見を尊重していた。
- ・クルアーンの記事も、女性の地位を認め、世界で初めて妻の遺産相続権を確立、信仰上は男女差別はないと強調されている。
- ・女性隔離、ヴェールの着用、長着は預言者の妻のステータスシンボル
→ 一般女性に広がる。本来はユダヤ教や、地中海世界の習慣
- ・男女隔離政策を実施するサウジアラビアでは、女性の世界で女性が働く
- ・サウジアラビアでも2018年以降、女性に運転免許を与えることを決定。
- ・時代や地域によって異なる対応があるが、女性の教育・就業は奨励される
- ・世界的な宗教復興現象のなか、厳格な規定を求める勢力の存在も懸念される。

左はミニア大学の薬学部の光景、女子学生が多い(岩崎真紀氏撮影)、
右はアインシャムス大学の外国語学部長とカイロで。トルストイの研究家。



⑩現代のイスラーム(2)

- ・世界へ広がるイスラーム:19億人の信者、世界第2位の宗教勢力
中央アジア、東南アジア、インド(13%でも約1億6000万人)、アフリカ、ヨーロッパに1500万人、アメリカでも第2位の宗教勢力に。
- ・日本でも5000~10000人の信者、来日外国人のムスリムは約10万人と推定される。
- ・日本のモスク・礼拝所は70以上に、大学でハラール・フードの販売、学食での提供、礼拝所の設置などの配慮。

左はウズベキスタンの女子大生、右はカイロ大学の大学生



⑪ イスラームの日常生活

結婚式の光景、エジプトの南部都市アスワン近郊、コム・オンボ近郊の村で。結婚式の披露宴は男女別々に行われることが多く、女性の宴席では、目いっぱいおしゃれを楽しみ、音楽に合わせて朝まで踊る。花婿は、ほとんどの場合、一時的に参加するが、すぐに退席することが多い。

披露宴に先立って、公証人、男性の証人2名と花嫁の父親の前で、夫婦が婚姻届に署名するキターブという儀式が行われる。イスラームでは婚姻は花婿と花嫁の父親との契約であるが、花嫁の親は署名はしない。(両方とも、岩崎真紀氏撮影)



⑱「イスラームの日常生活 おもてなしの料理

右はエジプトのカイロ市内で、中央の緑色のスープは、日本でも食べられるようになったモロヘイヤのスープ。

左はこの料理をふるまってくれた家庭で、私の右のご夫婦が招待してくれた。昔からの友人(2012・12撮影)。



⑪リビアとヨルダンのもてなし料理

左はリビアの豪商の家で、羊を穴埋めにして蒸し焼きにする料理、左下はラマダーンのお菓子、カタールイフ、ヨルダンでいただいたもの。右は前駐日リビア国臨時代理大使のアフマド・ナイリー博士の御実家で。



②⑩リビアのもてなし料理(2)

①⑨の左の料理をだしてくださった家で。中東では、ほとんどの家庭で、客に出す料理をするのは主婦やお嬢さんたち女性。ピラフ、挽肉詰め、サラダ、羊肉の蒸し焼きなど。

料理を作った女性たちは表に出てこないで、お礼を言い、許可を得て、奥に入ると、大喜びされる。右の写真は、奥様と娘さん、お孫さんたち、大歓迎を受けて、質問攻めにあった。



②1 日本でいただくラマダーンの御馳走

トルコ出身のエブル・イスピルさんから毎年のように、ラマダーン月のイフタールに招いていただいている。すべてお手製の体にもよい薄味で丁寧に作られたイフタールの御馳走は、とてもありがたく、疲れが癒される。断食は、本来は厳しい齋戒の修行期間であるが、同時に楽しい祭りの期間でもある。ムスリムではない日本の友人たちを毎年、暖かく招いてくださる。丁寧に料理されたご馳走をいただくと、悩みや苛立ちなどを忘れて、優しい気持ちになれる。ラマダーンの食事は、宗教儀式であると同時に、心の癒しでもあると思う。エブルさんはご自宅でトルコ料理を教えているが、岡山大学で工学博士号を取った学者でもある。

